

Newsletter

No. 3 May 2012

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

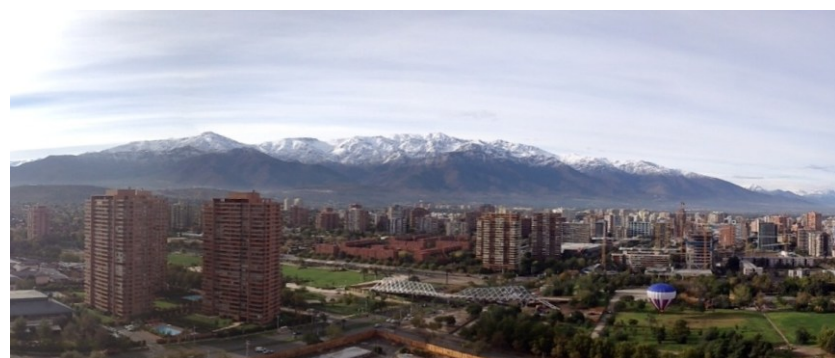
冬支度

南半球に位置するサンティアゴでは、短い秋を経て、ほどなく冬を迎えます。4月28日にはサマータイムが終了し、私の家では5月7日から暖房（セントラルヒーティングなのです）が入りました。街中からみえるアンデスの山々にも雪がちらほら見え始めました。朝夕はかなり冷え込むようになりましたが、日中の陽射しはまだまだ強く、日本との違いをまさに肌で感じております。

我が家のチリでの生活も2ヶ月余りが過ぎたところです。当初、小さな子供をつれての異国での生活には大きな不安を抱いておりましたが、過ごしやすい気候、気さくで親切的な人々、美味しい食事（お酒？）、などに癒され、少しずつ楽しめるようになってきました。スペイン語でのコミュニケーションには悪戦苦闘しておりますが、そんな苦労もまた、チリ生活ならではの楽しみとなりつつあります。

さて、チリからのニュースレターも第3号となりました。LACRC設立以来、進めて参りました大腸癌早期診断プロジェクトもいよいよ準備段階から実施段階へと進展することとなり、また共同研究、ラテンアメリカ諸国とのさらなる連携など、LACRCの活動も新たな局面を迎えております。スタッフは交代しましたが、今後もLACRCの活動やチリの文化・風土など、従来どおり「気軽に楽しく読んでいただけるよう」、皆様にお届けできればと考えております。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



うっすらと雪化粧をしたアンデス山脈



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
大腸癌早期診断プロジェクト	2
活動報告	4
Staff	
（河内講師、伊藤助教）	5
CLC News	7

大腸癌早期診断プロジェクト

本号では、ラテンアメリカ共同研究拠点 (Latin American Collaborative Research Center: LACRC) のメインミッションである大腸癌早期診断プロジェクトについて紹介いたします。

2010年1月に、本学はクリニカ・ラス・コンデス (以下、CLC)、チリ保健省 (以下、保健省) との間に「大腸癌診断国家プログラム及びパイロット・ステージ・プロジェクトの実施に関する協定」を締結し、チリにおける大腸癌の早期発見と治療に向けての取り組みを開始いたしました。しかしながら、協定締結後、チリ地震・地盤崩落があったことやチリ保健大臣がCLC出身者になったことなど、状況の変化に伴い計画変更が強いられたため、パイロットスタディの開始時期の変更を余儀なくされました。

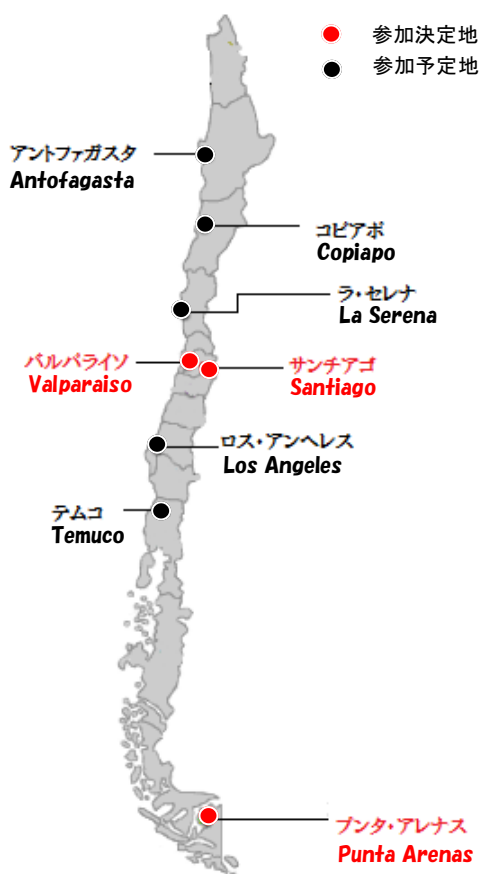
そこで、プロジェクトリーダーであるCLCのロペス医師は、第5州のバルパライソにあるエドアルド・ペレイラ病院や、第12州プンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院 (以下、マガジャネス病院) の協力を得て、各地方の資金を使ったサテライトプロジェクトを計画しました。また、首都サンティアゴにおいては、サン・ボルハ病院にある日智消化器病研究所 (以下、サン・ボルハ病院) に内視鏡医の育成を目的とした内視鏡センターを設置することができるよう関係各所へ働きかけました。

翌年の2011年には、バルパライソ、プンタ・アレナスにおいてサテライトプロジェクト実施の資金獲得に成功するとともに、サンティアゴにおけるパイロットスタディやサン・ボルハ病院の内視鏡センター設置の費用を保健省が負担することになりました。

これに伴い、チリ保健省と15の地方自治体、CLCをはじめとする4つの病院、また本学やチリ大学などの4大学が参加するCOLORED (大腸ネットワーク) が形成され、バルパライソ、プンタ・アレナス、サンティアゴで1万6000人を対象とした大腸癌早期診断プロジェクト PROYECTO DE PREVENCIÓN DE NEOPLASIA COLORRECTAL (以下、PRENEC) を実施することになりました。

そして2012年3月19日、PRENECを開始するための調印式および講習会が行われました。この調印式では、バルパライソ、プンタ・アレナス、サンティアゴの各拠点の代表が、PRENECの参加表明書に調印し、各拠点間での協力体制の確認を行いました。同日には、3拠点の秘書や技師、看護師、内視鏡医など約40名が、CLCのロペス医師、クロンバーク医師の指導する各分野ごとの講習会を受講しました。また同時に、CLCのボンセ看護師により、各拠点に設置されるPRENEC共通データベースの運用手順についての講習会も開催されました。なお、PRENECに関心を持つ第2州のアントファガスタ、第3州のコピアポ、第4州のラ・セレナ、第8州のロス・アンヘレス及び第9州のテムコの地方病院からも出席者があり、将来のPRENECへの加入を目的に今回の講習会に参加しました。

その後、まずはプンタ・アレナスとバルパライソでPRENECのメディアプロモーションが開始され、データベースの試験運用やマニュアル本の配布、CLC代表团による拠点訪問を経て、4月30日にPRENECがスタートいたしました。サンティアゴでは、8月に運用がスタートする予定です。



PRENEC対象者 16,000人

- ・50～75歳の者
- ・公的保険または民間保険加入者
- ・自覚症状がない者
- ・本PJIに同意する者

バルパライソ
エドアルド・ペレイラ病院
年間3,000人を対象

プンタ・アレナス
マガジャネス病院
年間3,000人を対象

サンティアゴ
サン・ボルハ病院
年間10,000人を対象



調印式にて参加表明書にサインをする各拠点の代表



講習会参加者の記念撮影

マガジャネス病院を訪問して

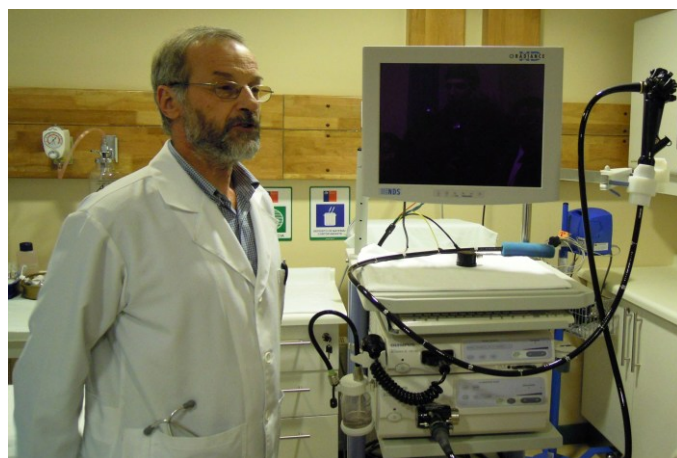
田中浩司 LACRC 食道・一般外科学分野

4月26日より泊2日で、現地視察のため、チリ最南端の都市プンタ・アレーナスにあるマガジャネス病院を訪問しました。南緯53度10分 西経70度56分に位置する同市は、サンチアゴから飛行機で南へ3時間半、マゼラン海峡に面し、パナマ運河が開通するまでは重要な航路として繁栄しました。現在は、人口約12万の静かな港町です。木が斜めに立つ強風で有名な都市ですが、訪問したときは天候に恵まれ、穏やかな天候でした。

同病院は公立病院ですが、新病院になって1年ということで、大変きれいで設備も最新のものが設置されていました。しかし、日本同様地方の医師不足のため、十分にそれを活用できていないようでした。同市の大腸がん罹患率はチリの罹患率の約2倍ということもあり、今回のプロジェクトは同市にとってかなり有益なものになると考えられます。当地での大腸癌検診プロジェクトの開始に伴い、今後、大腸内視鏡検査のため、定期的に同地を訪れる予定です。



CLC訪問団とビスポビッチ看護師(左から2番目)



カレロビッチ医師の案内により内視鏡室を見学

活動報告

JETROによるLACRC視察

2012年5月7日、独立行政法人日本貿易振興機構(以下、JETRO) サンティアゴ事務所の竹下幸治郎所長と延田幹夫氏がCLCを訪問され、LACRCの河内講師、田中助教と大腸癌早期診断プロジェクトやCLCとの共同研究について意見交換されました。

また、サンティアゴ事務所では、チリの医療機器市場への日本企業参入の可能性を調査しており、CLC大腸肛門科責任者のロペス医師にチリの医療機器会社と医師の関係性についてヒアリングされました。



LACRCオフィス入口にて(田中助教、竹下所長、延田氏、河内講師)

メディア掲載

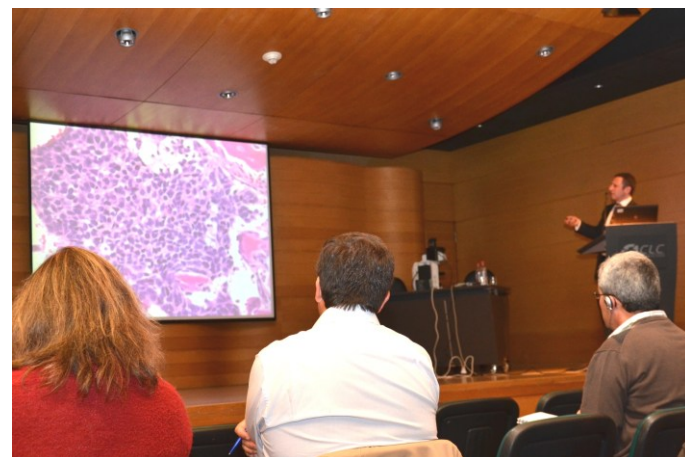
2012年2月に田中助教、伊藤助教が、「REVISTA FACULTAD DE MEDICINA」より、取材を受けました。「REVISTA FACULTAD DE MEDICINA」は、チリ大学医学部が年に数回発行している医学生や医療関係者を対象とした雑誌です。2012年6月発行の雑誌に掲載されており、本学のLACRCにおいての取り組みが紹介される予定です。



インタビュー時の記念撮影にて

THIRD CONJOINT COURSE IN SURGICAL PATHOLOGY

大腸癌早期診断プロジェクトの病理部門のリーダーであるクリニカ・ラス・コンデスのコントレラス病理部長が主催を務めるTHIRD CONJOINT COURSE IN SURGICAL PATHOLOGYが2012年4月16日から18日の間に開催され、LACRCオフィスより河内講師と伊藤助教が出席しました。本コースには、アメリカのMassachusetts General Hospital (Harvard Medical School)より講師陣が来智し、チリ国内やチリ近隣諸国より集まった病理医が3日間に渡り、講習を受けました。



Massachusetts General Hospitalのピーター・サドウ博士による講演

Staff

LACRC開所当時よりチリに赴任し、2年間にわたり、大腸癌早期発見プロジェクトに取り組んできた伊藤崇助教が、任期満了のため、2012年4月に離任いたしました。それに伴い本年3月に、河内洋講師が後任として、LACRCオフィスに着任いたしました。

初のLACRC赴任者として

伊藤崇 LACRC 人体病理学分野

私がチリに派遣されることが決まり、LACRCに赴任したのは2010年4月末のことです。チリでは2010年2月末に巨大地震があり、サンチアゴには建物倒壊などの大きな被害が無かったとはいえども、まだ十分に大災害の爪痕が残っていました。

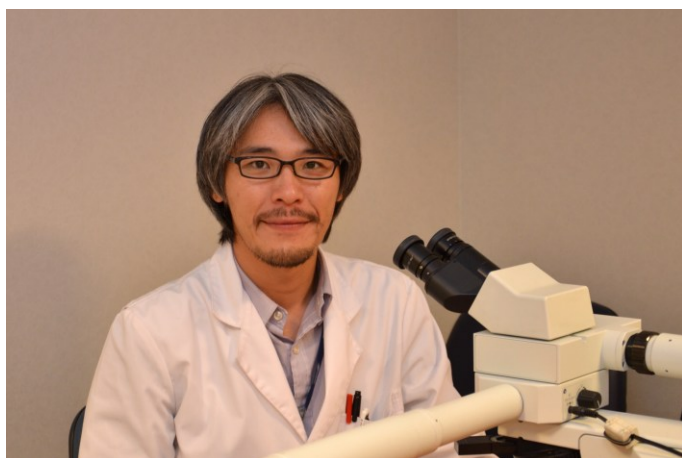
以来2年間にわたり、LACRCの病理スタッフとして、CLCでの病理診断業務や大腸癌の病理学的・分子生物学的研究に参加してきました。CLCと本学が主導する一大計画である大腸癌早期診断プロジェクトにおいては、病理診断標準化のためのプロトコルの作成に携りました。プロジェクトは間もなく実施に移される予定ですが、開始を見ぬまま河内講師に任務を引き継ぎ、帰国の段となりました。このスタートの現場に居合わせないことは心残りですが、日本からエールを送り、見守りたいと思います。

赴任以前の私は海外経験に乏しく、海外での勤務に大きな不安を感じていましたが、初めての経験に戸惑いながら任務に臨む私を、チリ人スタッフの方々はとても温かく迎えてくれたため、打ち解

けた雰囲気の中で共に仕事をすることができました。国が異なっても現代医学の基礎知識が変わらないのは当然なのですが、日本から見れば地球の裏側にあるチリで医学を学んだ医師・研究者らと学術的な議論を共有できたことは、私にとって新鮮でかけがえのない機会でした。このような経験を通じて、今では以前より地球が一回り小さく感じられるようになりました。

また私は本学からLACRCに派遣された初の職員であったため、始動したばかりのLACRCのオフィスが赴任者にとって活動しやすい環境整備することに始まり、研究・活動費の取扱いの検討、プロジェクト・セメスターでチリに来た学生生活・研究の補佐などにも多くの時間を費やす必要がありました。当初は慣れない環境の中で、学内勤務では携わったことのない業務を行うことに戸惑うこともありましたが、LACRCの秘書をはじめとしたCLCのスタッフと共に、自分にできるかぎりLACRCの基盤作りに精を出しました。

生活面でも、各種手続き、移動、買い物など、初めは何をするにも



伊藤助教(病理研究室にて)



病理の仲間と

悪戦苦闘する毎日でした。孤軍奮闘するうちに、徐々に増えていったチリ人や在チリ邦人の知人・友人の助けを借りながら、次第に快適な生活を営めるようになったことを思い返すと、とても感慨深いものです。チリ人・邦人を問わず、共に食事にでかけたりアクティビティをしたりする機会も多く、例えばCLC病理の同僚と何度もボーリング場へ出かけたこと、邦人の方々と海釣りに出かけたことなど、楽しかった思い出は数えきれません。



CLCの同僚とボーリング場にて

この2年間、素晴らしい人間関係にも恵まれ、充実した得難い経験を積ませていただきました。LACRCを通じた本学の南米における取り組みはまだ緒に就いたばかりですが、今後LACRCに関係する全てのメンバーが充足感と誇りを得られるようなプロジェクトへと発展すること、そしてこれが日智交流の架け橋の一つとなることを心より祈念し、離任の言葉とさせていただきます。



ロベス医師等とのバーベキューにて

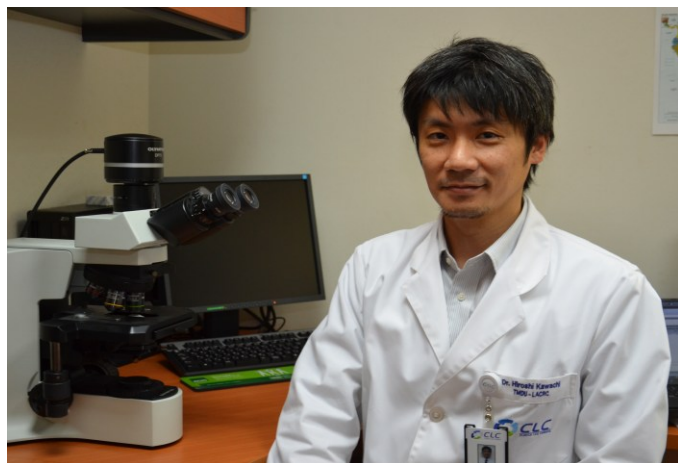
着任挨拶

河内洋 LACRC 人体病理学分野

本年3月17日より、伊藤崇助教の後任として、東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に赴任いたしました。伊藤助教と同じく人体病理学分野からの派遣となります。日本では病理医として、主に臨床分野での仕事に携わって参りましたが、この度、LACRCに赴任し、大腸癌早期診断プロジェクトの推進のみならず、日本・チリ共同研究への取り組み、プロジェクトセメスター、ラテンアメリカ諸国との連携など多岐に亘るミッションを眼前にして、果たして自分の才覚で対処できるのかと不安を感じております。幸い、前任者の尽力により良好な職場環境、関係各所との協力体制、人間関係を引き継ぐことができたことは救いとなっております。

LACRCは今後スタッフの増員が見込まれており、成果が求められる段階に入りつつあります。重圧のなかではありますが、何事も「楽しく、激しく、自分らしく」取り組んで参りたいと考えております。

LACRCスタッフ、ニュースレターともども、皆様の暖かいご支援、何卒よろしくお願い申し上げます。



河内講師(LACRCオフィスにて)

CLC News!

LACRCは、CLCとの間で締結した「ラテンアメリカ教育研究拠点(LACRC)開設に関する覚書(2009年)」に基づき、2010年4月よりCLC内にオフィスを構えています。CLCは、チリ共和国内では、1、2位を争う医療設備を備えた私立病院であり、最高レベルかつ安全な医療を提供することを理念とし、最新の医療環境の構築を追求し続けています。本号より、LACRCスタッフが駐在するCLCの最新情報をご紹介します。

PREVICOLON(大腸癌検診フェア)

2007年よりCLCにて毎年開催されているPREVICOLON(大腸癌検診キャンペーン)が、今年度も4月9日～20日の間に開催されました。PREVICOLONは、PRENECのリーダーでもあるCLC大腸肛門科責任者のロペス医師や、消化器科責任者のフルクサ医師を中心に年に1回実施されています。このキャンペーン中には、通常の半額で免疫学的便潜血検査を実施しており、陽性と出た患者には、通常の3割引の価格で内視鏡検査を提供しています。毎年このキャンペーン中に400人～600人ほどの患者が、免疫学的便潜血検査(iFOBT)を行っており、来年も大腸癌の早期発見を目的に本キャンペーンが実施される予定です。なお、期間中には、大きな大腸模型の設置や大腸癌に関するビデオの上映が行われ、来院者に向けて大腸癌の早期発見・予防の必要性を訴えました。この大腸の模型は、チリ国内各地に貸し出されており、チリ国民に対する大腸癌検診への啓発活動に活躍しています。



PREVICOLONの説明パンフレットとiFOBTキット



大腸模型の内部(中央奥:ポリープ、右側手前:進行癌)

編集後記

田中助教、河内講師の着任に伴い、LACRCオフィスのスタッフが新しくなりました。また今年度中に、助教1名、大学院生1名が着任予定ですので、更にオフィスが賑やかになりそうです。今後ともNewsletterを通じて、近況をご報告してまいりますので、今後の誌面にあたり、皆様からご意見・ご要望等がございましたら、お気軽にご連絡くださいませ。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 3, May 2012

[発行日] 2012年5月31日
[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl